

2008（平成20）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

*こういう古い問題をそのまま使っていると、2行～4行が通常で1問だけ5行という昨今の京大の問題に対する訓練になりません。今の受験生には解答行数を減らすなどの工夫が必要です。近年の京大本試験問題に合わせ、縮減した解答例も記します。

問一 ア 端的 イ 俳優 ウ はんさ エ 枚挙 オ ほてん

問二（解答欄五行）

日常的な身体動作は、ほぼ無意識に繰り返されており、その際の自分の視線には無頓着である。したがって、自己観察が不足している身体動作については、普段の無意識的な視線が把握できていないままに、自分を見る他人の視線を意識することで、自分の視線もそれに合わせてしまうから。

（→ 解答欄三行に改訂）

日常的な身体動作は、無意識に繰り返され、自分の視線には無頓着なので、観察が不足しているものについては、自分を見る他人の視線に自分の視線を合わせてしまうから。

問三（解答欄六行）

無意識に繰り返される日常的な身体動作は、最初から自分でできたのではなく、周囲の大人たちという他者の世話を受け、やがて初めて自力でできるようになるという習得のプロセスを経る。そのとき、今では忘れていたが、周囲の喜びを通じて大きな感動を覚えたのであり、身体には、そうした無数の動作と感動の記憶が内蔵されているという意味。

（→ 解答欄四行に改訂）

日常的な無意識の身体動作は、他者の世話を受けながら自力でできるようになる習得のプロセスを経ており、そのとき周囲の喜びを通じて大きな感動があった。身体には、それら無数の動作と感動の記憶が内蔵されているという意味。

問四（文系のみ）（解答欄七行）

身体への感動は、自己を束縛している、自己に固有の身体によって自己の無数の動作が可能となるという感覚を確認させるという仕方で、自己の実在感を生み出す。また、この感動は、周囲の他者が自己の身体動作を喜んでくれることを通じて得られるので、周囲の他者から認められることから自己の尊厳が、他方、自己に感動をもたらしてくれる存在であることから他者の尊厳が、それぞれ生み出される。

(→ 解答欄五行に改訂)

身体への感動は、無数の動作を自己のこの身体が行っているという実在感を生み出す。また、周囲の他者の喜びを通じてこの感動は得られるので、自己が周囲の他者から認められること、他者が自己に感動をもたらしてくれる存在であることから、自己と他者の尊厳がそれぞれ生み出される。

問五 (解答欄七行)

人間は、自分の身体に拘束されており、身体的な自己は、誕生の段階では地域や時代、家庭環境を選択できず、言語や習慣にも拘束されている。これらの拘束を無意識のまま忘却することが、自己自身にも他者に対しても決定的な欠落を生じ、現代社会の問題へと至ることもある。演劇的知も含めて教養は、無意識の拘束に気づかせることで人間を解放し、欠落を補う実践的な知であると筆者は考えている。

(→ 解答欄五行に改訂)

人間は、自分の身体、誕生した地域や時代、家庭環境、言語や習慣に拘束されており、それらを無意識のまま忘却することが、自己にも他者にも決定的な欠落を生じ、現代社会の問題へと至る。演劇的知を含む教養は、無意識の拘束に気づかせることで人間を解放し、欠落を補う実践的な知である (と筆者は考えている)。